

「葬儀について」



日本基督教団 札幌北部教会

2007年4月8日 発行

2011年10月23日 増補版発行

葬儀について

はじめに

わたしたちの教会では、教会活動計画として、「葬儀や結婚式など、諸式について学び検討する」と掲げています。人生の大きな節目を迎えるとき、そのことを信仰者としてどうけとめていきたいか、あるいは教会としてはどのように扱うこととするのか、共に考え、また形を整えていこうというものです。

実際問題としても、葬儀やそれにかかわることがらについて、どのように備えていったらいいか、よくわからないといった、とまどいや心配の声もきかれます。そこで、札幌北部教会として、葬儀についての基本的な考え方を資料としてまとめることといたしました。

1 死をどう考えるか

私たちは、だれも死を免れることはできません。死という厳粛な事実のもつ重い意味は、軽んぜられるべきではありません。しかしまた、私たちには、キリストにある信仰によって、永遠の命への希望が与えられています。わたしたちは、それぞれの死を思い、その重さを受け止めながら、なおそれを越えた希望を思うことができるのです。

わたしたちに、死について明らかにされていることは、そう多くはありません。死後については、知ることよりも信じることが求められています。主なる神は、死の後にあってもわたしたちの主です。死に際してこそ、わたしたちは自身を全く主にゆだねなければなりません。死んだ者は、全く主の支配のもとにおかれているのであって、人間がそれを左右することはできません。こうした信仰は、日本社会一般の考え方とは異なるものでしょう。

一般の生活習慣とのかかわりでは、死者崇拝のことも問題となります。多くの日本人は、死者の霊が身近に存在すると考え、「先祖の霊が見守っている」とか「死者が喜ぶ、悲しむ」という言い方が自然になされます。けれども、聖書の中では、死者の霊と生きている人間との交流についてはほとんど語られていないことに注意しなければなりません。もちろん、死者を何か人間以上の存在として崇めたり拝んだりすることは、偶像崇拝としてしりぞけなければなりません。

しかしそれは、死者を忘れ去ること、死者の思い出を遠ざけることとは違います。先に召された愛する親しい者たち、神の恵みの中を生きた先達を、神への信仰と共に思い起こすとき、その人々の記憶は、私たちの生涯を神のもとへと導く証人として語りかけてくることでしょう。死者を思い起こしつつ、共に神を仰ぐものでありたいと思います。

2 葬儀とは何か

*キリスト教の葬儀の基本的な考え方ー礼拝としての葬儀

日本では、仏教式の葬儀が一般的です。そこでは、葬儀として何が行われているのでしょうか。僧侶は、死者が成仏するように死者にむかって経を読み聞かせ、引導を渡します。参列者は「仏と成る」死者にむかって手を合わせて拝します。葬儀は、死者を悟りの境地に導いて仏と成し、それを礼拝するものと考えられます。しかし、私たちの信仰においては、死者のいっさいは、主なる神の手にゆだねるべきものです。人間の行うわざによって、死者の死後のありかたが定められるものではありません。またもちろん、私たちにとって、礼拝するべき方はただ三位一体の神おひとりですから、死者をあがめ、祭り、死者に何かをささげたり供えたりすることも、なすべきではありません。

それでは、私たちキリスト者にとって、葬儀とは何でしょうか。

キリスト者の生涯の大きなつとめとして、主を証しすることがあります。葬儀は、わたしたちが、自分の信仰によって主を証しする、最後の機会ということができます。つたない歩みであっても、自分の生涯の日々に、主が恵みを豊かに注ぎ、導いてくださったことを証して礼拝をささげるのです。葬儀は、死者を証人としてささげられる礼拝であるということができるのです。

またいっぽう、葬儀には、遺されたものたちが故人との別れを神から与えられたできごととして信仰によって受けとめ、悲しみと嘆きの中で主の慰めを祈り求めるといった重要な意味もあります。教会での葬儀は、教会という信仰に結ばれた共同体が、悲しみを共に受けとめ、生命の主を共に仰ぎ、互いに慰めを祈りあう、深い交わりのときでもあるのです。

つまり、キリスト教の葬儀は、主の名のもとに集う共同体が、故人の信仰の生涯によって証される主のみことばを聞いて、希望と慰めを見出だす礼拝だといえます。

現実には、信徒でない方の葬儀を依頼される場合もあります。その場合、故人の信仰の証しとしての葬儀を行うことはできないとしても、遺された者たちが共に主を仰ぎ、主のみことばに耳を傾け、慰めを祈り求める礼拝として葬儀を考えることができるでしょう。

*何をするか（前夜式・告別式・記念会など）

葬儀に際し実際にどのようなことが行われるかは、その地域や時代によってさまざまです。また、その時々事情に適切に対応することも大切です。こうでなければならぬ、という形があるのではなく、信仰に基づき、また個別の状況によって、ふさわしい形を考えていくことができますが、以下に、現在一般的な状況を踏まえ、葬儀として行われる諸式や祈りを列挙してみます。

<臨終の祈り>

死を迎えるにあたり、信仰によってその備えをするのは望ましいことです。もし状況が許すならば、あらかじめ牧師を呼び、また可能なら近親者や教会員と共に祈りの時をもつのは、ふさわしいことです。病床での聖餐式もまた慰めと恵みの時となるでしょう。

もちろん、「臨終の祈り」を、周囲から言い出して勧めるのは、いざとなると非常に難しいものです。自分自身の場合に、いつ、どうしてほしいか、あらかじめ周囲の人と話

し合っておくのは、大切なこととなります。

また、すでに重体・危篤となったときにも、できるだけ早く牧師に連絡し、たとえ意識のない状態であっても、祈りの時をもつことは、意味のあることです。

<枕頭の祈り>

召天の直後、あるいは牧師の到着をまって、近親者や親しかった方々と共に祈りのときをもちます。

病院で亡くなった場合には、遺体はいったん自宅へ運ばれるのが普通ですが、自宅に親戚や友人が集まったとき、また葬儀の打ち合わせのために関係者が集まったときに、葬儀の準備として祈りのときをもつことは、ふさわしいことです。

<納棺の祈り>

自宅に置かれていた遺体は、前夜式に先だつて納棺し、会場に運ばれることとなります。この際も、祈りをもって遺体を棺に納め、葬儀会場にむかいます。

<前夜式>

近年は、日中行われる告別式よりも前日の通夜の方が多くの方が集まる傾向にあります。このような事情を踏まえ、教会においても、前夜式として整えられた礼拝を行うのが一般的になっています。

場合によっては、これを遺族やごく近しい者たちのみの祈祷会（棺前祈祷会）として行うこともあります。遺体を葬儀会場に移動せずに自宅で行うこともあります。

<告別式>

葬儀全体の中心となる礼拝です。葬送式・召天記念礼拝・葬式などの呼び方もあります。死者を証人として、その生涯を導かれた主なる神にささげる礼拝ですから、できれば教会の礼拝堂で行うのが望ましいといえます。会堂の前方に棺を安置して行いますが、場合によっては先に火葬を行い、遺骨を置いての礼拝を行うこともあります。

<出棺の祈り>

礼拝を終えて火葬にむかう際に、出棺の祈りをささげます。なんらかの事情で告別式などより前に火葬を行う場合も、祈りをもって送り出すようにします。

<火葬前の祈り>

火葬に付す直前に、主の御手にすべてをゆだねる思いをもって祈りをささげます。

<記念会>

一般の「繰上げ法要」という習慣の影響か、火葬直後に記念会を行うことがあります。葬儀を行った会堂で行うこともあれば、別に会場を設定することもあります。

以上の諸式や祈りは、先にのべたように、こうしなければならない、というものではありません。基本的には、礼拝としては前夜式・告別式および記念会を行い、また死と葬りの行いの節目ごとに祈りをもってことにあたるといことが考えられています。礼拝としては告別式のみを行ったり、祈りを祈祷会の形式でおこなったり、どのような形で主を証しすることが自分自身の信仰にとってふさわしいか、よく考えておき、備えておくのも大事なことです。

3 死にそなえて

*家族と話し合っておくべきこと

あたりまえのことですが、自分の葬儀を自分でとりしきることはできません。「自分の葬儀はこのようにしてほしい」と、あらかじめ、家族と話をしたり、書き残したりしておくことは、大切なことです。

北部教会では、以前、会員の方々に「愛唱聖句・賛美歌」を書いていただいたファイルを保管しています。同様に、「自分の葬儀はこのようにしてほしい」と書いたものを、牧師の責任でお預かりすることも可能です。その際、「自分の葬儀についての希望を教会に預けてある」ということは家族にお話しておいていただくと、とっさの場合に混乱せずすむでしょう。

死や葬儀への備えについて家族で話をするということには、多かれ少なかれためらいや抵抗の気持ちが伴います。けれども、実際に死が近付けば近づくほど、なおさらそうした話はしにくくなってしまいます。とくに、家族が教会員でない場合には、クリスチャンとしての死や葬儀について、よく承知しておいてもらう必要があります。この資料じたいが、そうした話をする手がかりになるでしょう。また、そのような機会は、自分たちの死を見つめ、生を考え、信仰について語りあうよいチャンスとなるかもしれません。

また、死と葬儀に先だって、死の告知の問題もあります。病が重く、死が予想される場合、それを本人に告げて死への備えをなすべきなのかどうか、家族は大きなつらい悩みの中におかれることとなります。現実には、その状況によって決めるべきことですが、そのような場合にどうすべきか、あらかじめ家族で話し合っておくのは大事なことです。

また、日本の病院の現状では、病状が重くなったとき、牧師が病床を訪れようとしても面会を拒まれる可能性があります。そんなとき、家族の理解は不可欠です。

自分の葬儀について具体的な要望はなくとも、最低限、「葬儀は教会でするので、なにかあったら教会に連絡し、どうしたらいいか相談するように」ということは、了解しておくようにしましょう。

***用意しておくべきもの**

葬儀に備えて、とくにこれが絶対必要、というものはありませんが、自分の生涯をもって主を証しすると考えた際、何かの機会に、「愛唱聖句・賛美歌」などのほか、自身の信仰の歩みについて、たとえメモ程度でも書き残しておくといいでしょう。それも教会でお預かりすることもできます。

また、一般的なこととして、何かあったときに知らせるべき人々のリストや、身の回りの物の処分についても、遺言のようにして書き残しておくといいでしょう。

4 緊急時に

***教会への連絡**

入院中、重態となった場合などには、医者や看護師の診断などを詳しく牧師に伝えておくようにします。危篤の場合、昼夜にかかわらず牧師に知らせます。臨終の祈り、あるいは聖餐などが可能な場合はそのむねはつきり伝えます。

連絡を受けると、牧師はできるだけ早くその場に向かいます。役員など教会員が同行することもあります。そこで、家族の方々と共に、臨終の祈り・枕頭の祈りをささげます。

息をひきとった後の牧師のつとめは、遺族にみことばによる慰めを示すこと、また故人の信仰の証しとなる葬儀の準備を整えることにあります。このためには、遺族の協力が欠かせません。故人が、葬儀についての具体的な希望などを残している場合は、早い機会に牧師に伝えます。

牧師に連絡がとれない場合、役員や誰かに連絡をとります。牧師の到着が遅れる場合、できれば役員もしくは他の教会員がかかわっておもむくようにして、共に祈りのときをもつようにします。また牧師が長期にわたって不在の場合、近隣の牧師に葬儀をゆだねることもあります。

教会の行事などが重なる場合があります。主日の礼拝は何にもまして優先されますが、それ以外の場合は、牧師は葬儀に専念することになりますので、教会員はよく連絡をとりあって、支障のないように備えます。

***一般的手続き**

家族が亡くなったとき、当然、関わりのある方々へ連絡をしなければなりません。親族・勤務先など、緊急の際、連絡すべきところなどを、確認しておきましょう。

葬儀に、町内会や勤務先の会社などがかかわってくる場合もあります。その場合、その責任者にできるだけ早く連絡をとり、教会での葬儀であることをはっきりと伝え、教会と詳しく連絡をとりあうようお願いしておきます。

葬儀に関して、業者（葬儀社・式典社）を頼むと、費用はかかりますが、さまざまなことを依頼することができます。教会で特に指定している業者などはありませんが、心あたりがなく、どの業者がよいかわからない場合は、教会にご相談くだされば紹介することはできます。どの業者にせよ、やはり教会での葬儀なので教会と連絡をとってことにあたるよう始めにはっきりと伝えます。

人の死に関して、行政上の手続きが必要です。死亡診断書・火葬許可証などの書類を整える必要があります。病院で亡くなった場合は、死亡診断書を受け取ることを忘れないようにします。

最近、死亡に際して遺体を献体したり、臓器を移植のために提供することを希望する人々が増えてきました。そのような機関に登録をされている場合、すみやかに連絡をとると共に、そのことを教会や業者にお伝えください。

5 葬儀の実際的な準備

*時間の流れとともに

自宅等で亡くなった場合には、医師に死亡診断書を作成してもらう必要がありますので、医師に連絡して指示を仰ぎます。

病院で亡くなった場合、すみやかに自宅に移動する必要があります。移動の作業は通常業者に依頼することになりますので、この段階で業者を決めることになります。

遺体がいったん自宅に安置されてから、遺族・教会・業者、さらに町内会や会社関係者などが集まって、葬儀の日程・場所・分担などを打ち合わせます。このとき、できれば予想される参列者の数・写真・手続き用の認印などを用意しておきます。

遺族からは、喪主となるべき人のほかに、事情に通じた方がひとり、窓口になっていたくようにすると、後々に支障がありません。教会からは、牧師のほかに役員が出席します。この際、はじめに遺族から、キリスト教の信仰に基づく葬儀であることをお話いただくようにすると、後の話がスムーズであるようです。そのほか特に留意すべきことや、こうしたいという希望がある場合、この席ではっきり伝えます。できれば打ち合わせも祈りをもって始めるとよいでしょう。

*教会のすること

葬儀も礼拝として行われるものですから、礼拝を整えるという面に関しては、教会が責任をもって執り行ないます。葬儀の内容や会場の飾りつけなども、礼拝にふさわしく整えるため、場合によっては遺族等の希望にそえないこともあるかもしれませんが、葬儀もまた公同の信仰の証しであることを理解していただけるよう、打ち合わせの段階でよく話し合うことが大切です。

遺族との連絡や、教会の準備を整えるため、教会の窓口となる担当者を定めておくことが必要です。牧師は、実際には説教の準備にかかりきりになりますので、できるだけ役員の中からその葬儀の担当者を一名お願いすることになります。

葬儀を教会で行うときは、外部の方が教会の設備・備品を利用することもありますので、教会のほうで担当者を決めておくで混乱しないですみます。

***業者のすること**

業者には、必要な物品の調達・行政上の手続など、さまざまなことを依頼できます。ただ、キリスト教の葬儀に慣れていない業者の場合、仏教などの習慣などを持ち込んで来る場合があります。細かい点について、牧師の指示に従うよう伝えておきましょう。

業者では、さまざまな器物や装飾などを用意していますが、教会の葬儀では過剰な装飾などは不要です。どうしても必要なもの以外は、勧められてもはっきり断つかまわないものです。

***葬儀役員**

葬儀に際し、葬儀委員長以下の葬儀役員を定めることがあります。葬儀役員は、葬儀の実際面にかかわって来ますので、教会側から役員の担当者などが加わるようにすると、さまざまな連絡などがスムーズです。

6 実際的な事項

***非キリスト教的な習慣・用語**

葬儀に関して、一般の習慣として用いられていることばで、キリスト教の信仰にはふさわしくないものが多くありますので、注意しておきましょう。

- ・教会では「西暦」を用います。
- ・「香典」「供物」などは、仏教に由来することばです。
- ・「幽明」「冥福」など「幽界」「冥土」の存在を前提としたことばも、教会にはふさわしくないでしょう。
- ・「北枕」などの方角や、「暦（友引など）」を気にする必要はありません。
- ・「忌中」ということばや、参列者に塩を配ったり棺の蓋の釘を石で打ったりする習慣は、死を「汚れ」として忌む考えからきているもので、キリスト教とは異質なものです。
- ・祭壇に供え物を置いたり、会場に花輪・花籠を飾ったりするのは、もともとは「仏」となった故人を礼拝するための献げ物でしたが、現在ではむしろ贈り主と故人との親しい関係を示すためのものとなっているようです。いずれにせよ、主なる神

にささげられる礼拝の場には、望ましいものではありません。

*** 献花・弔辞その他**

先にふれたように、故人に供物をささげたり、その社会的な地位や人間関係を誇示するようなことは、キリスト教の葬儀にはふさわしいものではありません。これらを一切省くこともありますが、遺族の思いなどにも配慮し、礼拝に続いて献花を行う場合が多くあります。これは故人との個人的な関わりを振り返る告別の意味をもって行うもので、宗教的な意味のあるものではありませんが、その際に主なる神に黙祷をささげるのは適切なことと言えます。

教会の葬儀においては、いわゆる弔辞は、故人の思い出を語って、遺族を慰め、参列者と哀悼の思いを分かち合うためのものです。具体的には、故人にむかって「〇〇さん、あなたは…」と呼びかけるのではなく、参列者にむかって、「〇〇さんは、こんな方でした…」と語りかけるものです（弔電を送る場合も、これに準じます）。

弔辞は、日本ではもともと死者の霊を鎮めるためのものでした。しかし、キリスト教の信仰においては、死者は主なる神の手に全くゆだねられるべきものです。わたしたちのなすべきことは、「慰霊」ではなく、この地上に共に生きる者として互いに励ましあい、主の慰めを求めて祈ることなのです。

会場の装飾は、極端なことをいえば、ふだんの主日の礼拝と同様であってもかまわないのです。必要以上に華美になることは、むしろ避けたいものです。正面に安置した棺や写真の回りに花を置く程度でもよいのです。花の種類は、白いものに限ったりする必要はありません。花の他にろうそくをともし場合もありますが、それも装飾以外に宗教的な意味のあるものではありません。

近年は、火葬場の事情から、棺の中に遺品などを入れることは制約されるようになってきています。愛用の品などは、むしろ記念として保存しておくことがふさわしいのではないのでしょうか。

*** 故人略歴**

葬儀の説教や挨拶の中で紹介するため、家族の方に下記の点を含んだ略歴を作成していただくことになります。

生年月日、家族、信仰歴、履歴、愛唱聖書、愛唱讃美歌、趣味、エピソード、病状の経過、その他

これらについて、業者が記入しやすい用紙を用意していますので、それを利用してかまいませんが、一般的な項目のほかにも信仰の歩みなどもわかる範囲で記していただくことになります。

*** 死亡広告を出す場合**

新聞などに死亡広告を出すことが必要な場合、用語などについて、原稿の段階で牧師に相談するようにしましょう。

*** 他の会場を使う場合**

北部教会以外の会場で葬儀を行う場合も、葬儀の内容については教会が責任をもって整えることとなります。なんらかの事情で一般の葬祭場を使う場合、そのことを教会にも業者にもすみやかに伝えましょう。

また、他の教会の会堂を会場にお借りする場合、会場として借りるだけなのか、葬儀の内容までその教会にお願いするのか、混乱のないようにはっきり伝える必要があります。会場をお借りして、葬儀そのものについては北部教会で行う場合、できれば北部教会の牧師もしくは役員を通してお願いするほうが望ましいでしょう。その場合、オルガニストや会場準備など、その教会に何を依頼するかをよく確認することが必要です。

7 葬儀の後に

*** 献金・謝礼**

葬儀にあたっての教会への献金は、わたしたちが地上の歩みを終えるにあたって、それぞれの生涯の間に注がれた主のすべての恵みへの感謝の応答としてささげるものです。それぞれ生涯の終りに際しどのように感謝をささげるべきか、自分の意志による最後の献金として、家族などにあらかじめ指示しておくよう心がけましょう。

教会で葬儀を行った場合の費用については、資料付録の費用規定をご覧ください。何か事情のある場合には、率直にご相談ください。規定のほかに、経費（暖房費など）について承知しておきたいというような場合は、役員等にお尋ねください。

*** 納骨・墓地について**

葬儀の後、墓地に遺骨を納める時期について、特に定めはありませんが、できれば早い機会に納骨をおこなった方がよいでしょう。納骨の際にも、祈りをもって行うことがふさわしいことです。ふつう、納骨式として墓前で簡単な礼拝を行います。くわしくは牧師にご相談ください。

また、北部教会の墓地に納骨を希望される場合、教会の墓地管理委員会にお申し出ください。

*** 服喪について**

一般的に、肉親が亡くなった後しばらくは喪に服し、年賀の挨拶など、一定のお付き合いを遠慮することがあります。キリスト教ではそうしたことについて定めはありません。とくに、教会でのクリスマスやイースターの喜びに際しては遠慮する必要はありません。キリストは、死に打ち勝たれた方だからです。

* 記念会・召天者記念礼拝

仏教では、葬儀の後、一定の期間ごとに法要・法事を行う習慣がありますが、キリスト教では、そのような定めはありません。前述のように、死者についてはいっさいを主なる神にゆだねるのであり、法要や供養といった人間の行うわざによって死者の死後のありかたを定めようとするのは、信仰に反することだからです。

しかし、それは、葬儀が終われば死者のことについてはまったく忘れてしまっただけということではありません。

主なる神が命を与え恵みをもって導いた、かけがえのないひとりの人の生涯の歩みを振り返り、そこに現れた主の御手の働きに心をむけ、わたしたちの信仰の励みとするために、故人の生涯を思い起こす記念の機会をもつことは、ふさわしいことです。記念会の時期について、何日目、何年目にしなければならないということはありません。故人の誕生日や召天の記念日、あるいは家族や関係者の集まりやすい日によって設定してかまいません。

記念会は、墓地での墓前祈祷会として行ったり、教会その他の会場を用いて、礼拝や祈祷会の形式で行うこともあります。その際、牧師に聖書からのメッセージを語ってもらうのはふさわしいことです。その後、できるだけ一同で故人の思い出を語りあうようにしますが、その際食事を共にすることも多くあります。

また北部教会では、毎年9月の第1日曜の礼拝を召天者記念礼拝としています。札幌北部教会員として亡くなった方々やその家族、関係者などを、教会として記念するための礼拝です。礼拝の後には教会墓地に赴き、墓前祈祷会を行っています。遺族の方々も共に記念の礼拝をささげることができるよう、毎年案内をしています。

その他、亡くなった教会員を記念するため、遺族が、特定の主日の礼拝のために講壇の花を用意し、そのむね紹介したりすることもあります。

* 家庭での記念

キリスト教では、家庭で死者をまつための位牌や仏壇のようなものはありません。死者を拝み祭ることは厳に戒められているのです。

けれども、上に述べたように、それは死者を忘れ去っていいということではありません。故人の生涯や人となりを思い起こし、主の恵みに心をむけるという意味をもって故人を記念することは、家庭においても日々心掛けてよいものです。

故人の人となりや生涯の歩みを思い起こす手立てとして、身近に写真や遺品などを置いておくこともあります。写真を拝んだり、遺品を祭ったりすることはもちろんしりぞけなければなりません。故人の記念として保存すべきものはふさわしく大切にすべきでしょう。そして、日を決めて家族だけの小さな記念の時をもったり、おりにふれ子供や孫に故人のことを語り聞かせたりということも、だいたいな記念のわざであり、信仰の継承や励みになることです。

8 教会外の葬儀

* 他宗教の葬儀に参列するとき

日本の社会では、キリスト教信仰にもとづく葬儀が行われる機会は多くはありません。仏教など他の宗教に基づく葬儀に出席するとき、とりわけ、自分の家族や親族の葬儀を行うとき、キリスト者としてどのようにふるまうべきか、悩んだりとまどったりすることがあります。しかし、教会では、一律に「こうすべき」と定めるものではありません。それぞれの信仰と良心に従い、またとくに隣人への愛と思いやりに基づいて決断すべきです。他宗教の行事にどのようにかかわるべきか考える際、コリントの信徒への手紙一 8章および10章の学びが有益でしょう。

* 教会で葬儀を行うことが許されなかったとき

教会員が亡くなった場合でも、家族の理解が得られずに教会で葬儀を行うことができないこともあり得ます。そのような場合、後日適当な時に教会として故人をしのぶ集いをもち、信仰の交わりのなかで故人の生涯を記念することがあります。

9 墓地について

* 墓地の意義

日本では一般に、墓地を重んじる伝統があります。家族のよりどころや、自分がこの世に生きた証として、墓地を作り、家族に大切にしたいという願いは深いものがあります。

いうまでもなく、こうした墓地への思いは宗教と深い関係があります。日本の文化に古代以来深く根付いている「先祖崇拜」の心や習俗、あるいは仏教に由来する習慣などが、墓地のありかたや墓地についての考え方に深く関わっています。

教会においても、教会墓地をつくり、キリスト教信仰にもとづいて墓地での一定の行事を行ったりするところは少なくありません。しかし、教会の墓地のありかたについて、信仰によって改めて考えることは、わたしたちの信仰を明らかにする上でも重要なことです。

聖書の中では、墓地についての直接の教えはほとんどありません。旧約聖書によれば、人が死んだときにその遺体を墓に納めることは大切な行為とされ、また先祖代々の墓も設けられることがありました。しかし、墓そのものは汚れた場所とされ、ふだんは人が近づくことなく、もちろん、そこで礼拝が行われたり祈りを献げたりということもなかったようです。死者はもはや遠い存在となり、死者と何らかの交流をもつことも考えられていませんでした。

聖書で、墓地をめぐるもっとも大きなできごとは、いうまでもなく主イエス・キリストが十字架で殺されて墓に納められ、3日目にそこからよみがえられたことです。墓地は、神からも人からも遠く離れた場所でしたが、主イエス・キリストの復活を証する場所となり、神の恵みの福音を告げる場所となったのでした。

その後、キリスト教が各地に伝わり、さまざまな国や民族の文化・習慣にふれていく中で、墓地についてもいろいろなあり方がみられるようになります。しかし、墓地はあくまでも死者を礼拝したり、死者に祈りをささげたりする場所ではなく、主イエス・キリストの復活にもとづいて、終わりの日に至るまで、主の恵みを信じ祈りつつ、復活の希望を仰ぐためのものとされました。たとえば、ヨーロッパの古い教会には、会堂の地下に墓を設けたり、会堂の脇に石棺を置いたりしているところが少なくありません。死者もまた、主イエス・キリストの到来を待ち望んで、神への礼拝に連なっていることを表しているのです。

日本では、教会の墓地は、伝道と深く関わっています。明治政府は当初、キリスト教式の葬儀や墓地を認めませんでした。キリスト教の信徒も、やむを得ず仏式の葬儀を行い、お寺の墓地に葬られた時代があったのです。そうした制約はキリスト教にとって厳しい圧迫となりました。やがて制約が解かれたあとも、墓地とのかかわりは、教会にとって実際上の大きな問題となりました。キリスト教が社会に受け入れられるように、一般の習慣やならわしをとりいれながら葬儀や墓地のあり方が形作られるいっぽう、たとえば「葬式仏教」などと批判されるような宗教のあり方とは違うという誇りから、墓地や葬儀のあり方そのものをくわしく研究し議論するようなことはあまりなされなかったようです。その結果、とくに墓地については、それぞれの教会や信徒・牧師個人個人によって、さまざまな理解や考え、習慣や行事が行われるようになってしまっています。

北部教会においても、すでに教会墓地を整え、毎年墓前祈祷会などの行事も行われていますが、墓地の意味やその運用について、共通の理解をはぐくんでいくことは、教会としての大切な課題のひとつです。

* 教会墓地

北部教会では、1993年に石狩霊園内に教会墓地を建設し、また教会墓地管理・運営規約を定めました。規約により、教会に「墓地管理運営委員会」が設置されて墓地の管理・運営にあたっています。教会墓地の利用の実際については、同委員会にお問い合わせください。

参考までに、教会墓地管理・運営規約の一部を掲げます。

第7条

第4項（納骨献金）

納骨を希望する場合は、献金を行う。金額は、一件につき15万円とし、墓誌記名料は実費とする。但し、生活状況等、特別な事情のある場合は、規約第6条第1項により、減免することができる。

また、納骨を行わないこととなった場合には、規約第6条第1項により、返金することができる。

第5項（墓地使用可能者の範囲）

教会員で、納骨献金手続きを完了した本人と配偶者、両親、子供とその配偶者とする。但し客員その他の場合は当委員会で検討し、役員会で決定する。

教会の墓地は、あくまでも教会員の実際の必要のために設置されたものです。教会員それぞれの事情によって、他の墓地に埋葬することがあっても、なんらさしつかえありません。まして、それが信仰の優劣や主の前での立場の違いを表すようなことはまったくありません。

なお、教会墓地に掲げられている墓誌には、教会墓地に納骨されている方以外のお名前も刻まれています。教会墓地管理・運営規約の第2条（目的）に「札幌北部教会は、この教会で共に信仰の生涯を送り天に召された人々を末長く記念し、御国への信仰を固くする為に、教会墓地を設置した」とあるように、教会墓地は、ただ遺骨を納める場所としての機能だけでなく、教会の先達者の記念の意味合いが深いからです。

*** 納骨にあたって**

前述のように、火葬の後、墓地への納骨にあたっては、納骨式として祈りをもって行うのがふさわしいでしょう。教会墓地以外に納骨する場合でも同じです。たとえば、お寺にある家族の墓に納骨する場合でも、キリスト教による納骨式を行うことが可能な場合もあります。個別の事情については牧師によくご相談ください。

なお、教会墓地に納骨する場合、原則として遺骨を木綿の袋に納めてから墓地内に納骨することとなっています。実際の準備については墓地管理委員会にご相談ください。